

氏名・(本籍地) 廣川 堯 敏 (新潟県)
学位の種類 博士(仏教学)
学位記の番号 乙第87号
学位授与の日付 平成24年3月23日
学位論文題目 鎌倉浄土教の研究
論文審査委員 主査 小澤 憲 珠
副査 金子 寛 哉
副査 福原 隆 善

廣川 堯 敏 氏 学位請求論文審査報告書

「鎌倉浄土教の研究」

論文の内容の要旨

本研究は宗祖法然の誕生から三祖良忠の入寂にいたる154年間を五期に分類し、浄土宗鎮西教学の成立過程を論究したものである。

本論文の序論では鎌倉浄土教研究史を回顧し、現時点における研究状況と課題とを述べた上で研究方法としての法然門流初期教学五期区分説を提示している。

本論文の本篇は六篇よりなる。

第一篇 法然教学の諸問題

第一章「法然および法然門流と中古天台本覚思想」では、まず法然と中古天台東陽流の忠尋・相生流の皇覚、台密の谷流の皇慶・長宴、三昧流の良祐等との系譜上の関係、および五種の本覚思想文献と法然との思想的な関わりを明らかにし、次に第三節・第四節では法然門流隆寛・證空二師と東陽流・相生流・大原流との関わりについて論述し、鎌倉浄土教に対する本覚思想の影響について総論的な見通しを明らかにした。

第二章「法然および法然門流における本尊論」、第一節では従来あまり論じられなかった、浄土宗における本尊論の問題点を提示し、第二節では坐像よりも立像の方が法然浄土教における本尊論として、その教学的特徴によく合致すると指摘し、さらに第三節・第四節では立像本尊説の教理的根拠として、阿弥陀仏の活動性(立撮即行)と親近性(仏凡の人格的呼応関係)の二義があることを初めて指摘した。

第三章「醍醐本『法然上人伝記』『三心料簡事』の真偽問題」では従来唱えられている偽撰説を批判し、「三心料簡事」の三心釈と隆寛・證空二師のそれとを詳細に比較検討した結果、隆寛・證空二師の釈文の方

が「三心料簡事」の釈文よりもより進展した思想を示していることを初めて論証した。

第四章「法然教学における異類の助業説」では法然教学における五段階廃立説とは、まず第一段階では聖道門をしばらく閑き、第二段階では雑行をしばらく抛ち、第三段階では決定往生信を境として、前に廃捨された雑行が助業として復活し、第四段階ではその異類の助業が念仏正定業の上に止揚され、第五段階では前に廃捨された此土成仏の行業が浄土において復活し、実践され、成仏を目指す、という廃立説である。これは論者が初めて唱えた独創的な学説である。

第二篇 勢観房源智をめぐる諸問題

第一章「『選択要決』の書誌学的研究」では、今回、論者が新たに発見した永雅本を含め、三種の写本と義山校訂本(浄全本)とを詳細に比較・検討した結果、江戸期の学匠義山良照が写本に「沙門源智述」の撰号を書き加え、かつ本文にも徹底した加筆・訂正・削除の筆を入れたことが明らかとなった。浄全本と写本とを比較・対照した作業は今回が初めてである。

第二章「『選択要決』の撰述問題」では、本書の思想内容を検討すると、聖光の『徹選択集』『西宗要』『念仏名義集』と一致し、さらに良忠の『東宗要』『決疑鈔』と一致するので、その成立は良忠教学成立以降であるとし、その源智撰述説は義山が撰号を意図的に書き加えたことによるものと結論づけた。

第三篇 聖光房弁長教学の諸問題

第一章「聖光教学の特色」では、二祖聖光房弁長の活躍時代は法然門流初期教学五期区分説の第一・二・三期にわたっているが、そのうち自らの著述を撰述し

た時期はその第三期に集中している。本章では聖光が宝地房證真による中古天台本覚法門批判の影響をうけ、聖浄兼学を主張し、不離仏値遇仏・総別念仏説を強調した点について概説した。

第二章「聖光教学と西山義との対論」では、聖光にとって法然門下の異流への批判のうち、その最大の論争相手は西山義である。聖光は『授手印』を始め、多くの著述において、主として證空の特殊名目「行門・観門・弘願」「証得往生」、仏体即行説、臨終行儀軽視等をきびしく論破している。しかし、その批判は十分とはいえ、次の三祖良忠にその課題は委ねられることになる。

第四篇 然阿良忠教学の諸問題

第一章「一卷本『三心私記』と三巻本『三心私記哀益』」では、論者が発見した、未伝の一卷本『三心私記』に基づき、現行の三巻本『三心私記哀益』が忍濃により意図的に再編纂された、全くの別本であることを論証し、良忠撰述時の『三心私記』の原形を明らかにした。従来このような研究は全くなされてはいない。

第二章「『選択集略鈔』の成立」では論者が発見した、未伝の良忠撰述書である。したがって、従来の研究はひとつもない。本章はこの『略鈔』について、その思想内容を解明し、他の法然門下の異義との対論を検討し、良忠教学全体における位置づけを明らかにしたものである。その本文は翻刻篇に掲載した。

第三章「『観経疏聞書』と『観経疏光明抄』」では、『観経疏聞書』はいまだ刊行されていない良忠撰述書で、従来その思想内容にまで踏み込んだ研究はひとつもない。本章では初めて『玄義分聞書』『序分義聞書』を中心に長西の『光明抄』と比較研究し、良忠教学がいかに長西から大きな影響をうけているかについて論証した。『観経疏玄義分聞書』の本文を翻刻篇に掲載した。

第四章「『浄土宗要集』の成立過程」では、『浄土宗要集』は良忠最晩年の著作であって、引用する自著は十一部一五四例を数える。その成立過程は『西宗要』→『西宗要聴書』→『浄土宗要肝心集』→『浄土宗要集』の順序であると推定できる。良忠が対論した主たる異流である西山義との論争点について整理を行った。『浄土宗要集』の草稿本である『浄土宗要肝心集』（未刊）に注目し、『浄土宗要集』との比較検討を行ったのは初めてである。

第五章「宝地房證真撰『観経疏私記』と良忠撰『観経疏三积書』」では、良忠が『観経疏』を注釈するに当たって宝地房證真撰『観経疏私記』をしばしば引用し、その大きな影響をうけていることを、その引用例

を検討しつつ、詳細に論証した。良忠教学に対する證真の影響を指摘したのはこれが初めてである。

第五篇 善慧房證空教学の諸問題

第一章「證空撰述書の真偽問題」では、真偽未詳の證空撰述書である『浄土安心抄』『要文之抜書』の二書について、确实な證空撰述書と比較し、真撰書であることを論証した。このうち『浄土安心抄』の本文を翻刻篇に掲載した。

第二章「興空書写本『自筆鈔』の書誌学的研究」では、一九七三年（昭和四八）論者が発見した興空本『自筆鈔』の書誌学的検討を行った。この写本の発見によって『西山全書』所収の漢文体『観門要義鈔』を證空撰述時の原型に復元することが可能となった。本論文発表後、一九九〇年（平成二）興空本はほかの写本とともに『西山叢書』第三・四巻に所収され、翻刻・出版された。

第三章「證空教学における天台典籍の受容」では證空教学における天台典籍の受容について、天台止観・天台密教・天台円頓戒・天台浄土教の四項目にわけて、詳細に検討した。とくに證空は天台止観に関する用語を浄土教的に改変して用いており、また天台浄土教典籍については、受容と批判の両方の立場に立脚している。

第四章「證空教学の思想史的区分」では證空撰述書の成立年時および成立順序について検討した。すなわち、證空浄土教の思想史的区分は、最初期の著述が『自筆鈔』で、最晩年の著述が『定散料簡義』であって、『他筆鈔』『積学鈔』の両鈔はそれら両者の中間に位置する、と結論づけた。

第五章「證空教学の特殊名目」では、證空の特殊名目の典拠は、一応、善導の『観経疏』の釈文に求めることができるものの、その意味するところ、概念は善導と関係なく、全く證空の独創による。本章では「行門・観門・弘願」「即便往生・当得往生・証得往生」「釈迦教・弥陀教・二尊教」「機法一体」等の特殊名目について考究した。

第六章「證空教学における三心积」では證空教学における三心积について検討した。證空の三心积は『三部経大意』『三心料簡事』よりも思想的に進展した解釈を示しており、かつ隆寛・幸西・親鸞等の三心积と共通する面がありつつも、それぞれ独自の解釈を展開させている。一方、良忠はしばしば證空の三心积を批判し、きびしい対論を展開している。

第六篇 鎌倉浄土教における対論

第一章「善導・至誠心积をめぐる対論」では、まず證空・良忠それぞれの至誠心积の特徴を明らかにした

上で、両師の対論について論究した。すなわち、その対論内容は、①凡夫が真実心を持ち得るか否か、②至誠心を自力・他力に分積することの是非、③三心具足は段階的具足か、同時具足か、等の三項目である。

第二章「善導・深心釈をめぐる対論」も證空・良忠それぞれの深心釈の特徴を明らかにした上で、両師の対論について検討した。すなわち、その対論内容は、①深心における浅深の有無、②信と行との関わり、③正因・正行の解釈、④自力・他力の解釈、等の四項目である。

第三章「善導・廻向発願心釈をめぐる対論」では、法然門流のうち、隆寛・證空・長西・良忠等の四師を取り上げ、善導の廻向発願心釈の第一釈の文、第二釈の文、還相廻向釈の三文について、それぞれの解釈を比較検討した。四師のうち、隆寛・證空は科文・釈義でよく類似しており、一方、長西・良忠も互いによく類似している。

第四章「善導・二河白道論釈をめぐる対論」では、法然門流、隆寛・證空・親鸞・長西・良忠等の五師による二河白道論釈に対する解釈について比較検討した。白道について隆寛・證空は自力・他力二種白道説を、長西・良忠は衆生の願心を表わす一種白道説を、さらに親鸞は如来廻向の一種白道説を、それぞれ主張している。

第五章「善導『観経疏』第八像想観釈をめぐる対論」では、『観経』第八像想観「是心作仏是心是仏」の経文に対する法然門流、證空・良忠二師の解釈を比較検討した。すなわち、まず證空は「作仏」とは仏相を念ずること、「是仏」とは至心信樂の信心を想うことであるといい、良忠は「作仏」とは仏相を念ずること、「是仏」とは見仏することであるという。ともに救済論にもとづく解釈であると指摘した。

第六章「善導『観経疏』第九真身観釈をめぐる対論」では、まず『観経』「光明遍照」の経文の読み方について證空・良忠二師の解釈を比較し、次に善導の三縁釈について比較検討した。

総結

法然門下の浄土教研究の伝統は江戸時代以来、比較的に浄土真宗の学匠によるところが多い。明治・大正・昭和・平成においても安井広度、石田充之、浅井成海等、真宗の研究者ばかりである。彼らは常に法然を親鸞にいたる過渡的な、未完成な浄土教者と見なし、親鸞をもって完成された浄土教者であると結論づける。

一方、近年、四種の新しい鎌倉浄土教研究が次々となされるようになった。まず第一は法然を、それへの

批判者明恵との対比という視点から行う研究である（塚本善隆『法然』、町田宗鳳『法然対明恵』、袴谷憲昭『法然と明恵』等）。第二は法然および門下の浄土教者を「聖」ととらえる聖仏教の視点からの研究である（吉田清『源空教団成立史の研究』、伊藤唯真『聖仏教史の研究』上・下、等）。第三は中古天台本覚思想という視点からの研究である（島地大等『天台教学史』、田村芳朗『鎌倉新仏教思想の研究』、大久保良順「天台口伝法門と浄土教」、末木文美士『鎌倉仏教形成論』等）。これら天台本覚思想関連の研究書はこれ以外にもきわめて多いが、法然門下と関わる研究は少ない。論者も『鎌倉新仏教と中古天台との交渉に関する研究』（科学研究費〔平成2・3・4年〕成果報告書、本論文第一篇第一章掲載）、「法然門流初期教学と中古天台」（『天台学報』28）を発表している。最近の最も新しい研究は第四、顕密体制論という視点からの研究である（黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』、平雅行『日本中世の社会と仏教』等）。顕密体制論の立場からの法然および門下研究として大きな影響を与えたのは平氏の上記著述である。平氏は①法然の念仏説は諸行往生の否定を本質とする。②法然門下の起行派とは法然の念仏説を顕密主義的に再解釈した立場をいい、安心派とは法然の念仏説を全面開花させた立場をいう、と主張する。この平氏の問題提起は法然および門下研究を再び親鸞偏重の鎌倉浄土教研究へと逆もどりさせる危険性を孕んでいるといえよう。

前述したように法然門流初期教学五期区分説にもとづき、第一期から第五期までのそれぞれの時期ごとに、その相互関係に注目しつつ、法然門下諸師の浄土教を解明した。

第一篇第三章では「三心料簡事」の法然真撰説を主張し、第四章では念仏以外の雑行は決定往生信の確立以後、異類の助業として再評価されるとし、五段階廃立説を主張した。

第二篇では『選択要決』源智偽撰説を主張した。

第三篇では二祖聖光の最大の論争相手は西山證空であると指摘し、その批判を検証した。

第四篇の良忠研究では①未伝の三種の著述（一巻本『三心私記』、『選択集略鈔』、『浄土宗要肝心集』）を発見し、その新資料にもとづく思想的研究を行ったこと、②良忠には年代的に同一の教学上の課題、あるいは同一の宗典に対する釈義に変遷が見られることに注目し、その釈義の変遷史を解明したこと等が指摘できる。

第五篇の證空研究では①未伝の三種の著述（『浄土安心抄』、『要文之抜書』、興空本『自筆鈔』）を発見し、

それらの新資料にもとづく思想的研究を行ったこと、②證空教学の思想史的展開について、『自筆鈔』、『他筆鈔』、『積学鈔』三著を軸に解明したこと、③天台本覚思想の浄土教的展開という視点から證空教学を解明したこと等が指摘できる。

第六篇の法然門流における対論では鎌倉浄土教における六種の共通課題(至誠心積・深心積・廻向発願心積・二河白道喻積・像想観積・真身観積)に対して、法然門流四師(隆寛・證空・長西・良忠)の『観経疏』末註の比較研究という視点から研究を行った。

審査結果の要旨

鎌倉浄土教研究は、伝統的には、浄土真宗では西山(西山宗義)・鎮西(浄土宗義)・今家(真宗義)の三派比較研究という視点から江戸時代を通しておこなわれてきており、かつ浄土宗でも妙瑞・経替・義山・忍徴等の学僧が活躍してきている。

ところが、近年の傾向は広く宗派の枠を超えて、関西の大阪大学・関東の駒澤大学・東京大学等に広がりを見せていることである。このような近年の研究動向を受けてまとめられたのが本論文である。

本論文の成果とその課題とについて、以下の問題点を指摘したい。

1、現代の研究者による法然批判

『日本中世の社会と仏教』の著者平雅行氏は、法然の説は「諸行往生の否定を本質としている」と断定し、法然より親鸞にいたって今や浄土教が「唯一の真の仏法」となったという。このような諸行往生可否の問題・法然の親鸞の理解の問題等は、法然門下全体を見すえた総合的研究の立場から再検討すべきであろう。

2、現代の研究者による浄土宗義(鎮西教学)批判

上記の平雅行氏はさらに浄土宗義において諸行往生を認めることを批判して「聖光・良忠ら浄土宗鎮西派は、法然の思想を本願念仏説(顕密仏教的浄土教)的に再解釈してゆくことによって、顕密仏教の一宗派として生き延びようとした」という。すなわち、浄土宗義は諸行往生の否定を主張する法然の正統的な教学を継承するものではなく、反対に顕密仏教的浄土教に逆戻りしたと批判している。はたしてそのように言えるのであろうか。このような顕密仏教的浄土教へ逆戻りさせたという批判に対しては慎重に検討する必要がある。

3、五期区分説と門下諸師・諸流の教学形成への動向

二祖聖光の活動期は五期区分説の中では第三期に相当する。したがって、聖光による入手可能な門下諸流の典籍は、西山義では『自筆鈔』、一念義では『玄義分抄』等であって、證空の『他筆鈔』『積学鈔』等は入手困難か、あるいは不可能であった。故に聖光が関説する西山義の情報は全く不十分と言わざるを得ない。次に三祖良忠の活動期は第三、四、五期に相当する。良忠による入手可能な門下諸流の典籍は、西山義では『他筆鈔』『積学鈔』『西山宗要』、多念義では『具三心義』『散善義問答』『極楽浄土宗義』『定善義私見聞』、諸行本願義では『光明抄』『専雑二修義』、および宝地房証真の『観経疏私記』等である。良忠は聖光に比べて圧倒的に多くの他流の典籍を披見できたのである。とくに西山義批判が精緻を極めたのは当然であって、最終的に良忠の他流研究を集大成した『東宗要』が完成されるに至った。

さらに逆に良忠の著作が他流の典籍に大きな影響を与えた例は、『浄土宗要肝心集』より念空道教の『二十願決疑問答』へ、『伝通記』より顕意道教の『楷定記』へ、『決疑鈔』より行観の『選択集秘鈔』・堯慧の『選択集秘鈔』へ、等も列挙することができるし、またほぼ同時期に同じ京都で撰述された典籍に良忠の『東宗要』と顕意道教の『西山宗要』とがある。

4、発掘された新資料による新視点と新知見

(A) 源智撰述書

『選択要決』の養楽寺本・聖徳寺本の発見によって、源智撰述説は否定され、行観撰『選択集秘鈔』以降の成立であることが明らかとなり、本書が鎮西義対西山義・一念義との論争の産物であることを論証した。

(B) 良忠撰述書

①『三心私記』

一卷本の発見によって、良忠撰述当時の本書の形態および良忠初期の教学の特徴が明らかとなった。とくに深心積の内容の大部分が正雑二行の五番相對論であることは注目される。

②『観経疏聞書』

『聞書』は良忠の最初の『観経疏』の講義録であって、とくに長西の『光明抄』の影響がきわめて大きい。良忠の『観経疏』解釈の展開を、思想史的に『聞書』→『略鈔』→『伝通記』と順次論証している。

③『浄土宗要肝心集』

論者が初めて『肝心集』が『東宗要』の草稿本であると結論づけた。この『肝心集』の内容のうち、三心

釈の占める頁数がきわめて多いことは、良忠がその所帰には他派の三心釈に重大な関心を寄せていたことを物語っている。

④『選択集略鈔』

本鈔についての体系的な研究は一つもない。本鈔は『三心私記』『決疑鈔』につぐ、もう一つの『選択集』の注釈書であって、證空撰『他筆鈔』、長西撰『専雑二修義』、伝長西撰『念仏本願義』等を批判していることは注目される。

(C) 證空撰述書

①『要文之抜書』

本書は修学時代の證空による、備忘のための抜書集である。本書によって證空の思想背景を、自著によって論証することができた。

②興空本『自筆鈔』

興空本によって『自筆鈔』が證空の最も確実な、最初期の撰述書であることが論証できた。

③『浄土安心抄』

本抄は證空撰述書、とくに『積学抄』と思想的に一致すること、また特殊名目「機法一体」を引用すること等は注目される。したがって、本抄は證空か、あるいは西山義の著作の可能性が高い。

④『観経疏積学抄』

本抄についての体系的な研究はいまだ全くなされていない。本研究では本抄を思想史的に證空の晩年に近い撰述書として位置づけ、処々に『自筆鈔』『他筆鈔』との比較研究をおこなっている。證空が辿り着いた最終段階の浄土教学をあらわす著述として本抄はもっと重視されるべきであろう。

5、思想史的な研究方法論の導入

まず、良忠研究ではその撰述書を、千葉時代・鎌倉時代・京都時代の三期に分類した上で、同一の宗典に対する注釈書、例えば、『選択集』については『三心私記』→『決疑鈔』→『選択集略鈔』の順、『観経疏』については『聞書』→『略鈔』→『伝通記』の順等というように思想史的に解釈史を追及している。さらには『選択集』の末註・『観経疏』の末註の枠を超えて、同一の善導釈文（例えば、三心釈等）に關説したすべての良忠撰述書を年代順に並べて、その解釈の展開史を解明している。

次に證空研究ではその思想史的区分を[一]前期(特殊名目「行門・観門・弘願」を依用する時期)、[二]中・後期(特殊名目「顕行・示観、正因・正行、示観顕行二反へル」等を依用する時期)、[三]晩年(特殊名目

「能請・所請・能説・所説・能為・所為」と依用する時期)の三期とし、その思想展開を『自筆鈔』→『他筆鈔』→『積学抄』→『定散料簡義』の順とし、その解釈の展開を解明している。

6、鎌倉期四師十典籍の相互比較にもとづく鎌倉浄土教の総合的研究

本論文六篇「鎌倉浄土教における対論」では、鎌倉浄土教を代表する隆寛・證空・長西・良忠の四師(あるいは親鸞も)とその十典籍(『具三心義』・『散善義問答』・『極楽浄土宗義』・『自筆鈔』・『他筆鈔』・『積学抄』・『光明抄』・『聞書』・『略鈔』・『伝通記』)を中心に宗典の同一釈文に対する解釈の相違点に注目し、論究している。しかしながら、いまだ論じ漏らした諸課題も、さらなる論究が期待される。

以上のような視点・方法論にもとづいて浄土宗義(鎮西教学)の成立過程を、門下諸師・諸流とのかかわりあいの中で多角的に論究したのが本論文と言える。

さて本論文は分量的にも大部であるが、評価すべき点はやはり鎌倉浄土教という一分野を明確に提示し、初期法然門下における三心を中心とした議論を丁寧に整理し、特に證空と良忠の解釈学的な相異を明示している点である。本論文によって新たな鎌倉浄土教の研究が始まるといっても過言ではない。しかし一方において、各篇ごとの内容はすぐれているが、大部にわたる本論文全体の視座が不明確であるという難がある。一応、日本浄土教が真宗史観にもとづいている親鸞偏重のあり方を是正しようとする姿勢をうかがうことができるが、やはり本論文の視座は證空教学にあるのではないかともいえよう。また法然浄土教と證空教学とがどのような相違があり、また何故に證空教学に独自性が出たのかという点に関しては今後の課題であろう。

以上のように本論文は今後の様々な課題を提示しているが、学術的価値は極めて高いものであり、中世仏教および鎌倉浄土教研究に不可欠なものであることに何ら変わりはない。よって本論文を学位請求論文にふさわしい内容であると評価する。